

サウンド・デザイン演習 2018
まとめ



VERTIGO

(制作過程で使った映像について)

アルフレッド・ヒッチコック (監督) 『めまい』 (1958年公開) のオープニング映像

主演：ジェームス・スチュワート，キム・ノヴァック

音楽：バーナード・ハーマン

(ミニマル風の制作過程で使った映像について)

- ・ オープニング 「映像の制作」 は、 **グラフィック・デザイン** で著名な **ソール・バス Saul Bass (1920 - 1996 , アメリカ)**
- ・ 1950年代～1970年代まで 多くの映画のオープニング映像を担当

↓ ソール・バスの映画オープニング映像集動画

<http://www.artofthetitle.com/feature/the-title-design-of-saul-and-elaine-bass/>

- ・ (本業であるデザイナーとして)
有名なコーポレーションアイデンティティ (C.I.) を多数デザインした
日本でも、味の素、京王百貨店、コーセー化粧品、紀文食品 など多数

ソール・バス Saul Bass (1920 - 1996, アメリカ, グラフィック・デザイナー)





<http://flexbrandingdesign.com/2011/12/14/saul-bass-design-icon/>



<https://www.kose.co.jp/>



<http://www.kibun.co.jp/>



<http://www.vitbbs.cn/a/LOGOdaquan/2011/0328/18532.html>



<https://www.pinterest.com/pin/28921622584035590/>



「弊社は企業の若々しさや信頼性を表現できる「ブルー」と「ハト」をモチーフに、アメリカ人デザイナー、ソールバスに包装紙のデザインを依頼しました。商業デザイン、企業CIなどの分野で活躍したバスは、とりわけ映画のタイトルデザインの第一人者として知られます。「私はその中に、楽しさ、生命の祝福、それと同時に澄んだ静けさを表現しようと努めました」とバスが語るハトが連なって飛ぶデザインは、〔彼の作った映画オープニング映像の〕「黄金の腕」「悲しみよ こんにちは」「グラン・プリ」などに見られるモチーフの連続にも通じています。これにより、バスはアメリカの由緒あるデザインコンクールで最優秀作品賞を受賞しました。」



NORTH BY
NORTHWEST

(ミニマル風で使用した映像素材について)

- CG の実制作は、1960年代からの 「コンピュータアート」 の草分け
ジョン・ホイットニー・シニア John Whitney Sr. (1917 – 1995)

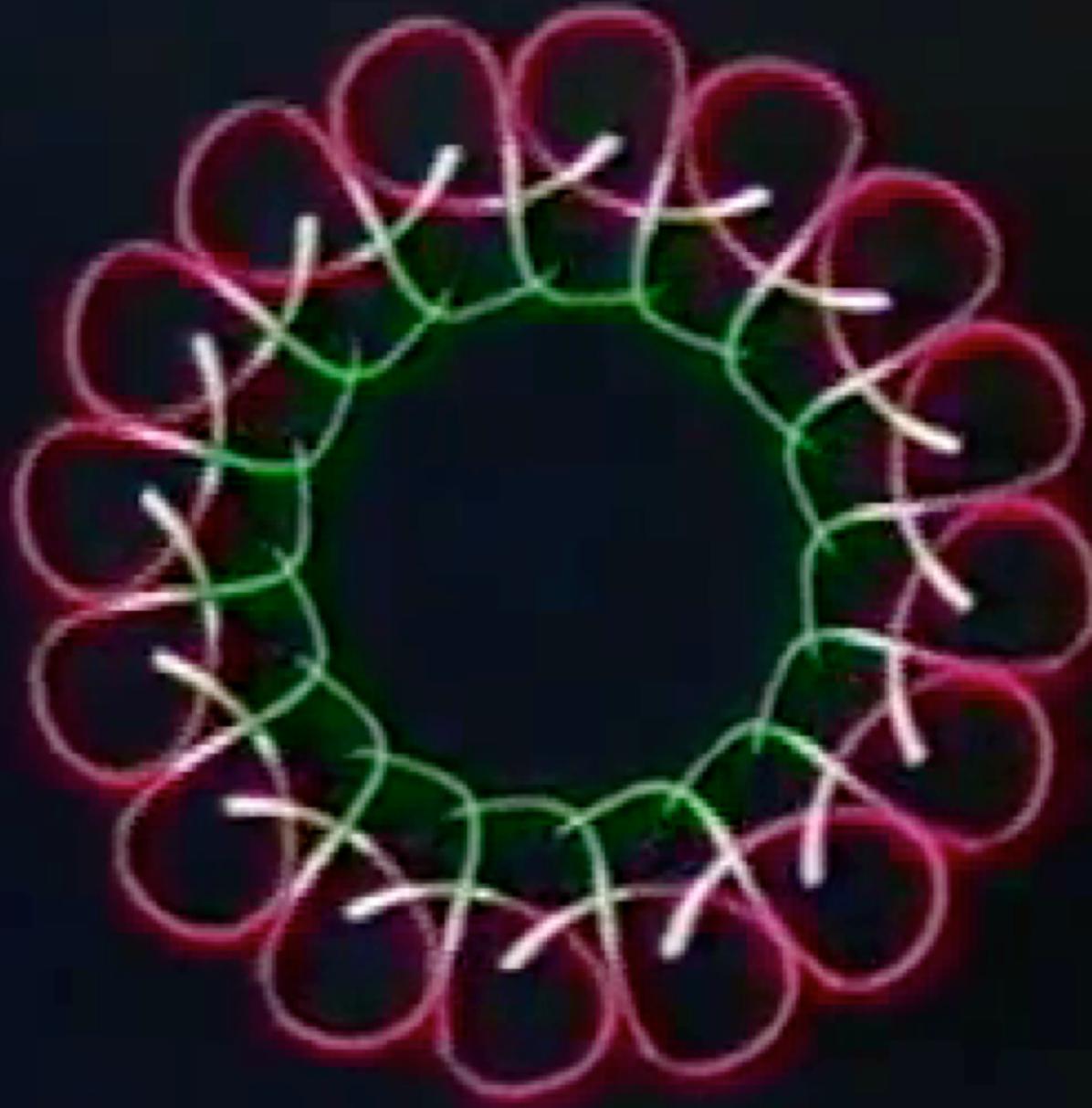
「 1950年代から1960年代にかけて、コンピュータアートとビデオアート が相前後して
展開を開始する。現在のメディアアートの直接のルーツ は、ほぼ同時期に発展してゆく
ことになる この2つのジャンルにある と考えることができる 」

白井雅人ら『メディアアートの教科書』 フィルムアート社、2008年、12～13頁。

代表作の例

【youtube】 John Whitney "Catalog" 1961

<https://www.youtube.com/watch?v=TbV7loKp69s>



1937～38年まで、ジョン・ホイットニーは、パリで12音技法の作曲を学んだ経験がある
(wikipedia “John Whitney (animator)” より)。

〈コンピューターアート〉の代表作品
電圧制御の計算機とブラウン管モニター

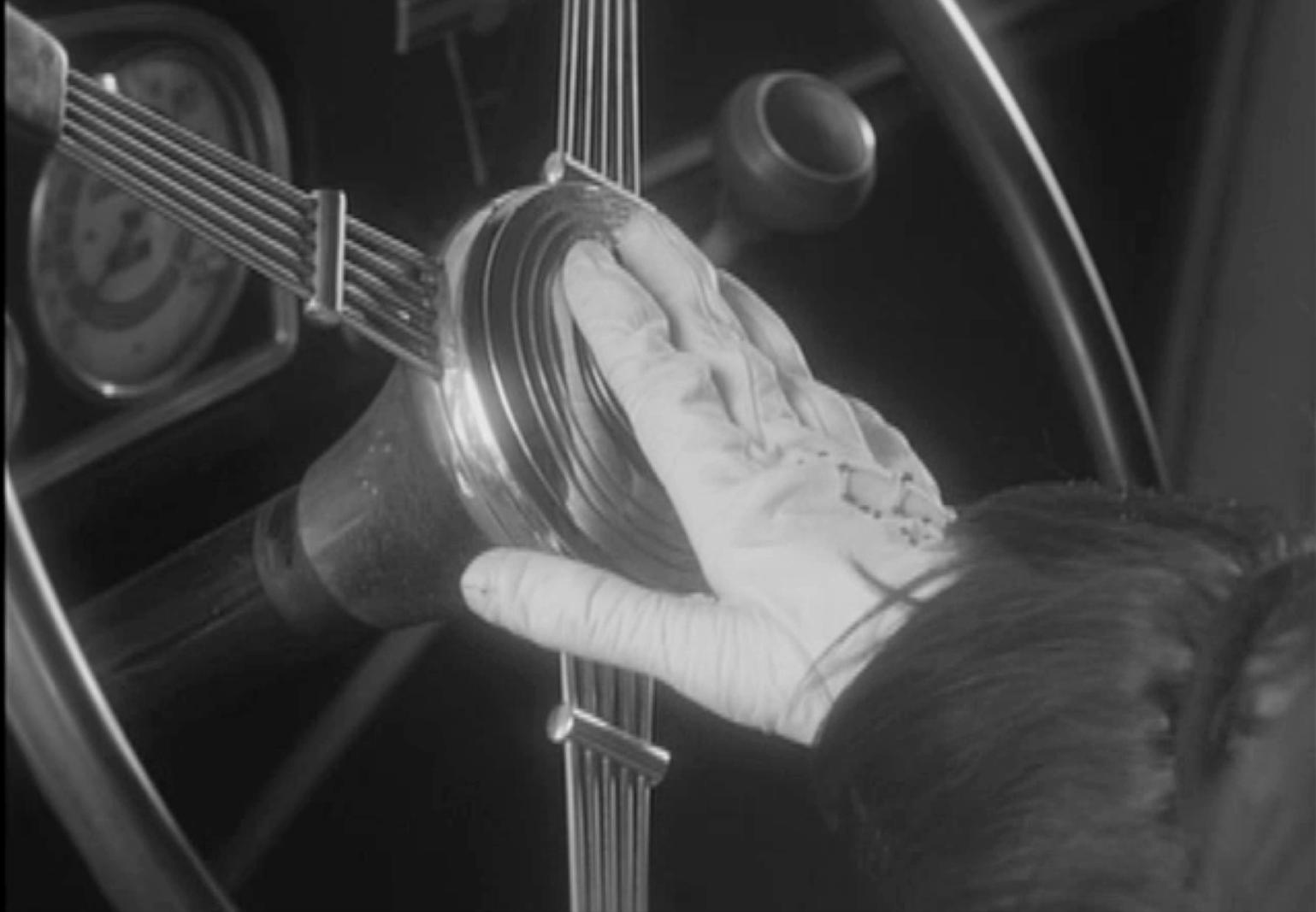
<https://www.youtube.com/watch?v=TbV7loKp69s>

映画音楽の名曲 『めまい』 から 「愛の情景」 Scene d'amour (1958)

音楽：バーナード・ハーマン Bernard Herrmann



映画『アーティスト』(2011) 1:29:00 辺りのクライマックスシーンより(4分間)



今日の映画でも『めまい』(1958)の映画音楽「愛の情景」がオマージュとして使用されている。さらに、映像面でもまた、車を運転する女性を前方から写すショットは、ヒッチコック監督の特徴的な画面作りへのオマージュと考えられる(『サイコ』(1960)や『汚名』(1946)など)。

まとめ

音楽を映像と共に考える意義

～ なぜ音楽と美術を区別すべきではないか？ 西欧近代批判の視点から

- 古代ギリシャ → 「ムーシケー」としての表現
B.C. 1000 – B.C. 100
- 中世 → 超越者を讃える表現
A.C. 400 – 1600
- 近世 → 王侯貴族を讃える表現（背景としての「王権神授説」）
1600 – 1800
- 近代 → 市民社会を讃える表現（神と貴族を否定）
1800 – 1960
神の代替としての「藝術」が誕生。自律化する。
- 現代 → 「西欧近代主義」（= 藝術）の省察。
1970 –
その超克への模索。

啓蒙思想の特徴 : 西欧「近代主義」の特徴

- **西欧中心主義** eurocentrism

西洋こそが世界で最も進んだ文明であるという考え

- **要素還元主義** reductionism

物事の本質をさぐるには、本質以外の余計な要素を極力排除すべしとする考え

- **進歩主義** progressivism

新しいことは常に良いとする考え

- **人間中心主義** anthropocentrism / humanism

たとえば、人間を 自然環境・生物 など 万物の中心とする考え

- **機械論** mechanism

人間は科学によって自然を制御することができるとする

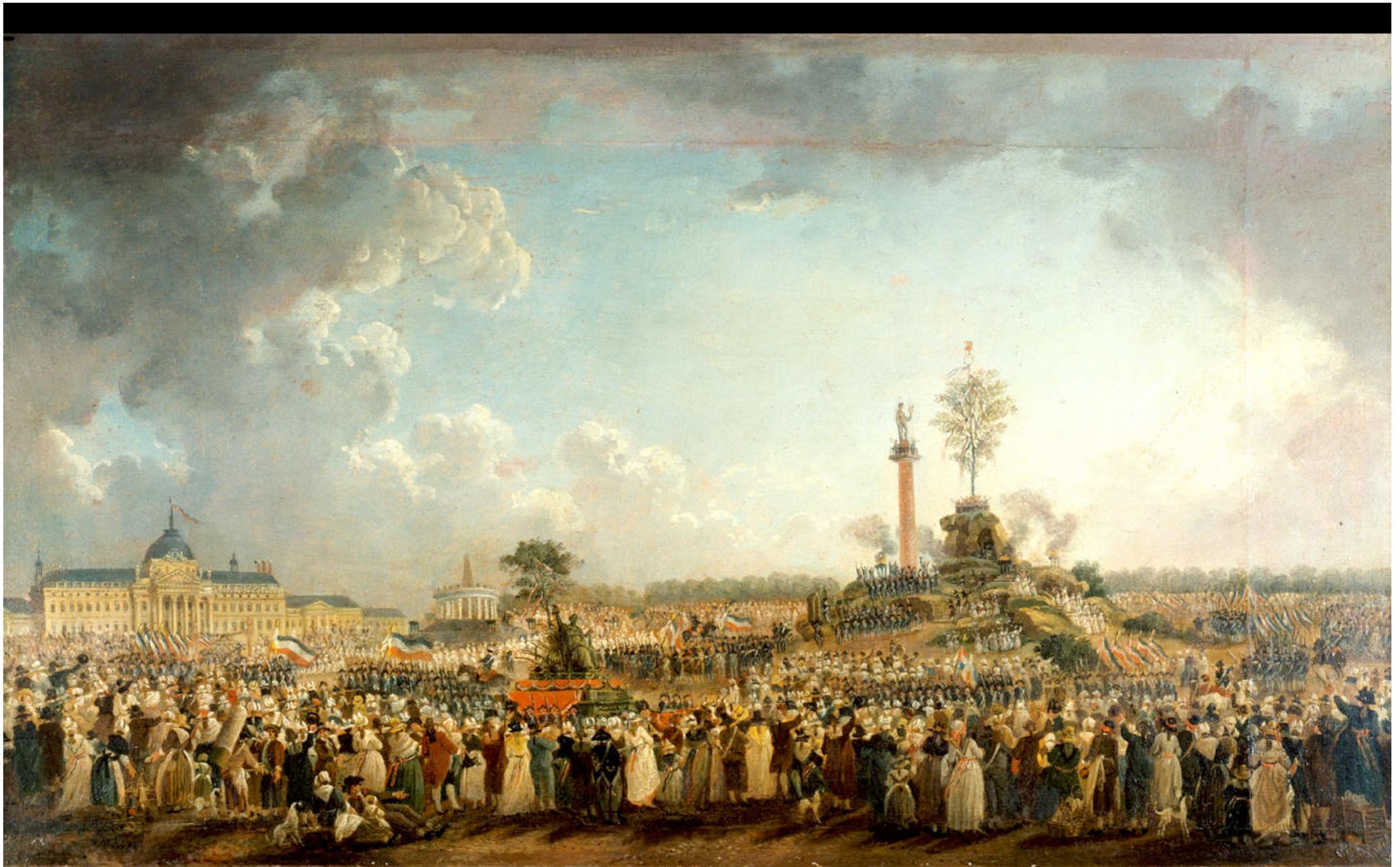
「今日われわれが普通に使用している『芸術』という概念は
もともと西洋の近代社会において成立した概念である」

[村田誠一 : 242]

近代藝術： 神に代わる存在

「人間が世界の主人となるということは
人間がみずから神に代わる存在となることを意味する」 [松宮：80]

「『芸術家』とは理念的にはみずから神となって、自己の作品を通じて、
歴史と社会がいまだ発見しえなかった新しい価値を創出する
『創造者』となることである」 [松宮：67]



フランス「最高存在の祭典」(人為的につくられた理性的宗教)
Festival of the Cult of the Supreme Being, 1794

祭典の演出は画家のジャック＝ルイ・ダヴィッド

「自律美学」から 美学的「形式主義」へ

表現における 美的自律性と 人間的感情の排除

自律化する〈近代藝術〉

- ・「西洋の近代藝術 を規定している根本動向は
自律化・純粹化の運動である」と言われる」[国安：30]

自律化する〈近代藝術〉

- じりつ【自律】
 - 自分で自分の行為を規制すること。外部からの制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること。[広辞苑]
- 「自律化・純粹化」を目指すとは、**芸術が芸術の外の諸規定から自由となり、自分自身で成り立つ自立した存在となること。**
- 〈唯一絶対の真理の本質〉をより純粹な形で呈示しようとする

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg
(1909-1994, アメリカの美術批評家)

「平面性、二次元性は、絵画が他の芸術と
分かち持っていない唯一の条件であった」

(グリーンバーグ「モダニズムの絵画」より)



クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg
(1909-1994, アメリカの美術批評家)

絵画は、その固有の形式的要素「平面性」を自己批判的に追求すべし。



「メディウム・スペシフィシティ」 Medium Specificity ※媒体特性

「素材や媒体に固有の性質のことを示す美学／批評用語。
モダニズムの美術批評の理論的展開において重視され、
特に批評家、C・グリーンバーグの言説によって広まった」

(Web『アートワード, 現代美術用語辞典 ver.2.0』より)



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 1948年
ニューヨーク近代美術館 (MOMA) 撮影: T.Ishii



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 (1948) @ MOMA



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 (1948) @ MOMA



バーネット・ニューマン 《崇高にして英雄的なる人》 1950-51年 (242.9 × 542.0 cm)

「抽象表現主義」 > 「カラーフィールド・ペインティング」 ('50s頃) の例



ジュールズ・オリツキー
“END RUN “ (1967)



ジュールズ・オリツキー
“BEAUTY MOUTH-TWENTY FOUR “ (1972)

※ グリーンバーグからの評価が高かった作家

自律美学的、形式主義的 「近代藝術」の帰趨

モダンアートの帰結（絵画篇）

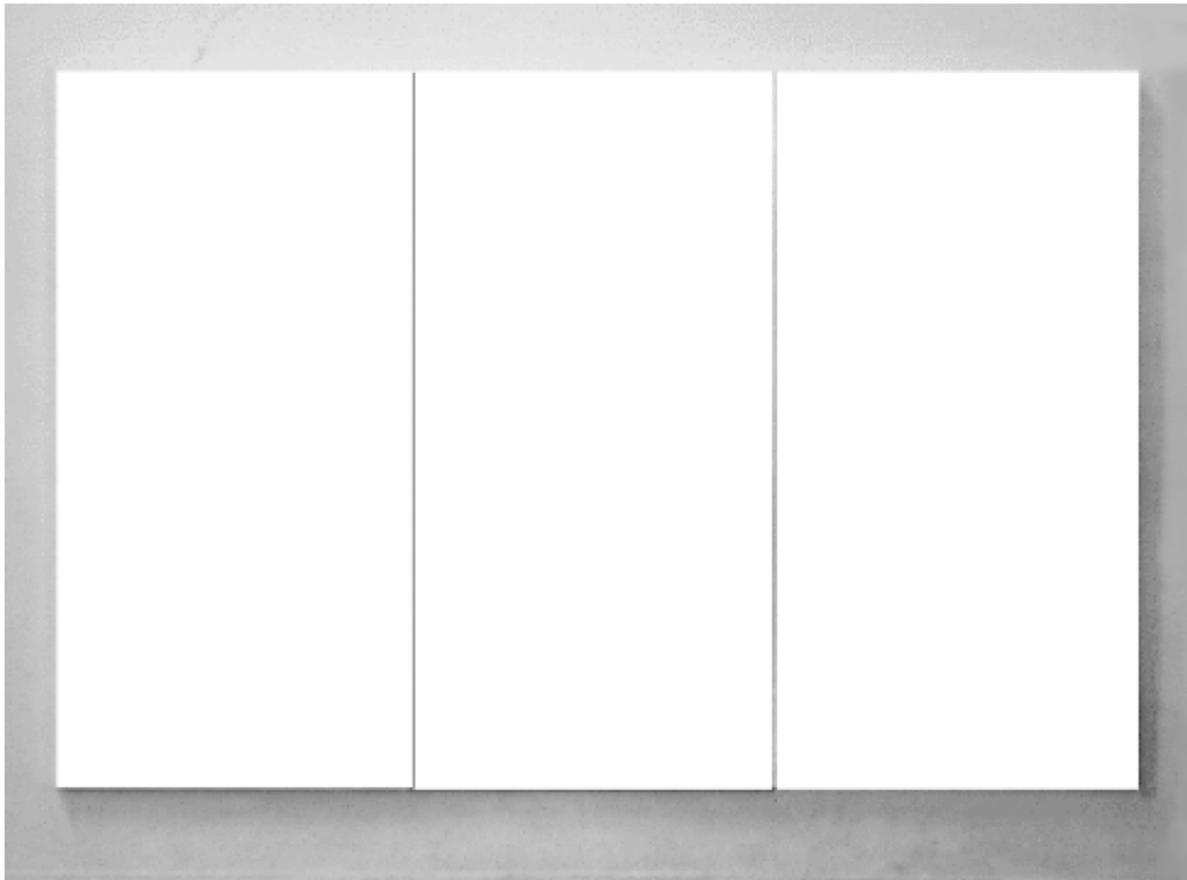


ロバート・ラウシェンバーグ
『白い絵画』1951

<http://canonpluscanon.wordpress.com/2010/03/09/robert-rauschenberg-white-paintings/>

モダンアートの帰結（絵画篇）

3
近代芸術の
帰趨



ロバート・ラウシェンバーグ
『白い絵画』1951

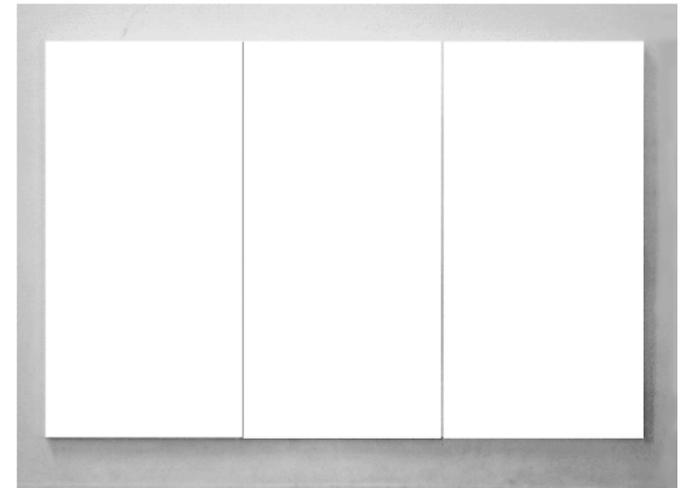
<http://monicadmurgia.com/tag/robert-rauschenberg/>

モダンアートの帰結（絵画篇）

「私に **4分33秒** の作曲させたのは、
無響室での体験と、
ロバート・ラウシェンバーグの
“white painting” だった」

ジョン・ケージ『自叙伝』(1989) より

http://johncage.org/autobiographical_statement.html



モダンアートの帰結（音楽篇）



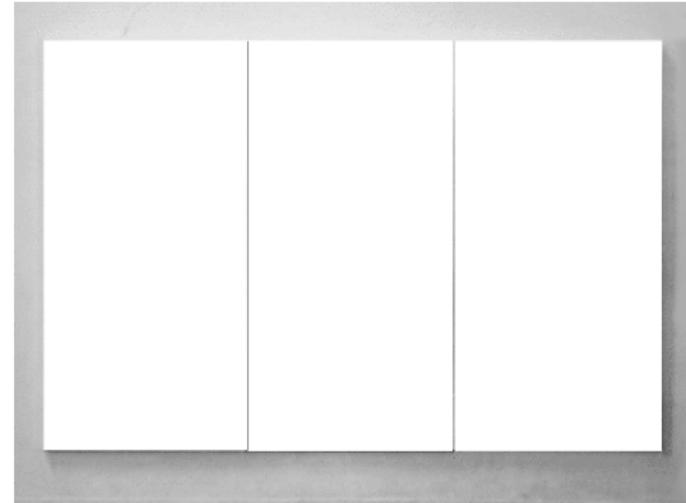
ジョン・ケージ『4分33秒』(1952)

<https://www.youtube.com/watch?v=qWuNVByFVTY>

(※ いわば 純化の極地)

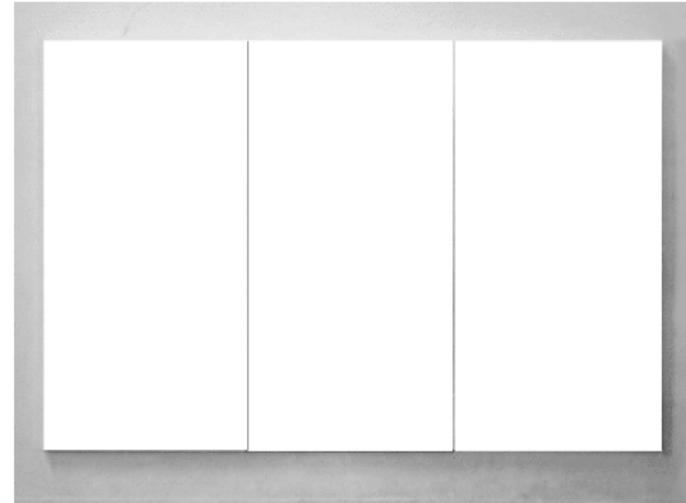
- ・ 3楽章形式
- ・ 第1楽章を33秒、第2楽章を2分40秒、第3楽章を1分20秒
- ・ 楽章間に休みがある
- ・ 合計時間4分33秒で〈演奏〉する

モダンアートの帰結（音楽篇）



〈啓蒙思想〉に導かれた
〈要素還元主義〉、〈進歩主義〉を、究極に、突き詰めた結果、
音楽に音が無くなり、絵画には色と形が無くなった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

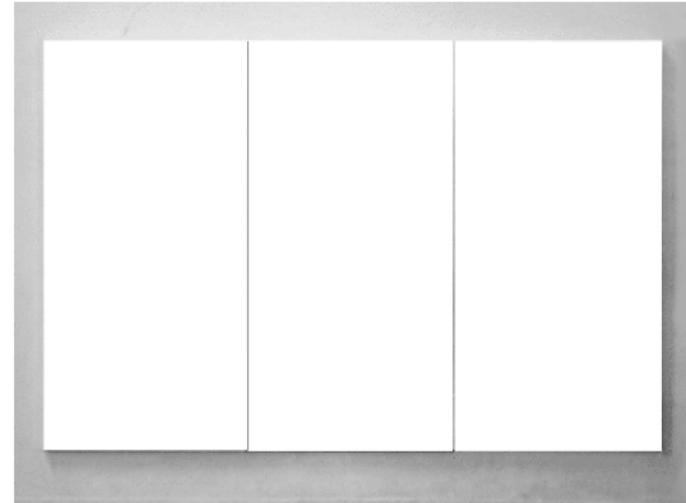


音楽に音が無く、絵画には色と形が無い。

したがって、これ以上の〈進歩〉は見込めなくなった。

しかしそれは〈近代芸術〉〔モダンアート〕の必然的な着地点であった。

モダンアートの帰結（音楽篇）

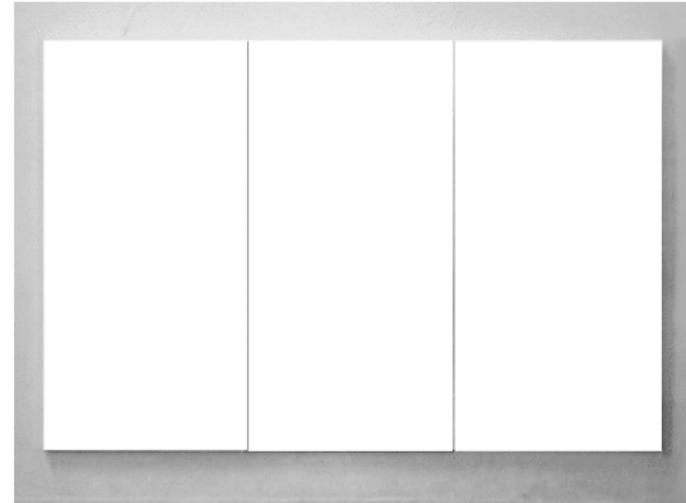


ニヒリズムとは「最高の価値が無価値になるということである」

～フリードリヒ・ニーチェ『道徳の系譜』

モダンアートの帰結（音楽篇）

3
近代芸術の
帰趨



さて、このような〈近代〉の限界を前にして、
〈現代〉のわれわれは どうする？

啓蒙思想の特徴 = 近代藝術の特徴 = 現代アート の方向性のヒント

- **西洋中心主義**

西欧のあり方を普遍的なものとする考え。また男性中心主義にもつながる。

- **要素還元主義**

分類し、可能な限り細部に切り分けることで、物事の〈本質〉をすることが出来るとする考え
芸術の「本質」をさぐるために、他の表現要素にたよらない〈自律的な芸術〉への志向にも。

- **進歩主義**

新しいものは良く、古いものは良くないとする考え。

われわれは、〈真理〉に到達する歴史上の過程にいるという考え。

- **人間中心主義**

人間の理性によって自然を制御して〈真理〉に到達しようとする考え

※ 「物語映像」の中の音楽の可能性

- 西欧近代的〈藝術〉音楽を批判的に乗り越えるための映像音楽
 - 音楽、美術、文学、、、などの区分の近代的性格を相対視する
 - いわば〈ギリシャ悲劇的なメディア〉としての「物語映像」
 - 音楽が生まれる自然な誘因をとりもどすこと
(還元・純化・極度の自律化から、自然な文脈の中に音楽を再定位)
 - 音楽の自律性と映像(等)の自律性との均衡を探ること
やはり不可避な自律性はある。関係性の中での価値創出
 - 「物語映像」をとおした自然の〈模倣〉、自然への敬意としての音楽
※ 脱・近代的人間中心主義。ジャン=ジャック・ルソー〈音楽模倣論〉の可能性の現代的再考。

以上、おつかれさまでした

主な参考文献・さらなる知識のために

石井宏 (2004) 『反音楽史：さらばベートーヴェン』 新潮社。

岡田暁生 (2005) 『西洋音楽史：「クラシック」の黄昏』 中公新書。

神林恒道 (1996) 『シェリングとその時代：ロマン主義美学の研究』 行路社。

高辻知義ら (1997) 『ヨーロッパ・ロマン主義を読み直す』 岩波書店。

松宮秀治 (2008) 『芸術崇拜の思想』 白水社。

三浦信一郎 (1999) 「ベートーヴェン神話の形成と支配：音楽における近代」、神林恒道ら編『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

吉田寛 (2002) 「E・T・A・ホフマンの音楽美学にみる歴史哲学的思考：器楽の美学はいかにして進歩的歴史観と結びついたのか」 『美学芸術学研究』 20、東京大学大学院人文社会科学研究科。

E・T・A・ホフマン (1810=1984) 「ベートーヴェン・第五交響曲」 鈴木潔訳『無限への憧憬：ドイツ・ロマン派の思想と芸術』 国書刊行会。

E・バーク (1757 = 1999) 『崇高と美の観念の起源』 中野好之訳、みすず書房。

小田部胤久 (2009) 『西洋美学史』 東京大学出版会。

熊野純彦 (2006) 『西洋哲学史：近代から現代へ』 岩波新書。

村田誠一 (1999) 「近代の終焉?: 芸術的表現の可能性と限界」、神林恒道ら編『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

ヴィンケルマン (1755 = 1976) 『ギリシア美術模倣論』 澤柳大五郎訳、座右宝刊行会。

バトラー (1747 = 1984) 『芸術論』 山縣熙訳、近代美学双書。

国安洋 (1991) 『〈藝術〉の終焉』 春秋社

エドゥアルト・ハンスリック (1854=1960) 『音楽美論』 渡辺護訳、岩波文庫 青503-1。

カント (1790 = 1964) 『判断力批判 (上・下) 』 篠田秀雄訳、岩波文庫。

クレメント・グリーンバーグ (2005) 『グリーンバーグ批評選集』 藤枝晃弘訳、勁草書房。

佐々木健一 (1995) 「かたち」 『美学辞典』 東京大学出版会。

菅原教夫 (1992) 『やさしい美術：モダンとポストモダン』 読売新聞社。

三浦信一郎 (1999) 「ベートーヴェン神話の形成と支配：音楽における近代」、神林恒道ら
編『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

沼野雄司 (2005) 『リゲティ、ベリオ、ブーレーズ』 音楽之友社。